

《第487回（2021年12月9日）子どもの本の読書会記録》 参加者：6人

時間：10:00～11:30 場所：オーテピア4階集会室

『白い紙/サラム』

シリル・ネザマフィ/著

文芸春秋

本書は、イラン出身の著者が日本語で執筆した物語です。「白い紙」「サラム」の二作を収録しています。

「白い紙」は、イラン・イラク戦争下でのイランで、首都テヘランから空爆を避けて田舎に引っ越してきた高校生の「私」の目線で書かれています。「私」は、同級生で勉強家のハサンに淡い恋心を抱くようになります。しかし徐々に迫ってくる戦争の影が、二人や家族、街に暮らす人々の未来を巻き込んでいきます。

「サラム」は、現代日本で通訳のアルバイトをしている大学生の「私」が主人公。アフガン人難民を支援する弁護士の田中先生とともに、収容所で難民認定を待つ少女、レイラと出会います。「私」は通訳として収容所に通ううちに、難民を取り巻く絶望的な現実を目の当たりにすることに。

どちらも、個人の方ではどうしようもないような生々しい社会状況を、まるでノンフィクションのように描いています。国家に翻弄されながら生きる人々の姿を、素直に伝えてくる作品です。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

●翻訳本と思って読んだら、訳者が書かれていなかった。そこで、日本語で書かれた本ということに気付いた。2009年に発行されているが、その頃と状況は変わっていないように思う。むしろ悪化している。小説の形をとっているが、作者の実体験に基づいているのではないだろうか。「白い紙」では、受け入れるしかない悲しい未来を感じた。「サラム」では、日本における難民認定の難しさが分かった。最後の一文にははっとさせられた。

●読めてよかった作品。「白い紙」では、以前見た特攻隊の番組を思い出した。戦争に行かないと、家族が非国民扱いされるという内容で、ハサンの心情と近いものがあった。未来がどこでどうなるか分からない切なさがあり、感情移入できた。最後のトラックのシーンは、つらくて何とも言えない。国の指導者により、社会や生活

が変わってしまうことを、若い人たちにも考えてもらいたい。「サラム」では、今年、名古屋入管で収容中の女性が亡くなった事件とリンクした。

●戦地に若者を赴かせるものは、日本では赤紙で、イランでは白い紙だった。市民の戦意が高揚する中で、女じゃなかったら兵士に志願したいと興奮する「私」と、一人唇を噛むハサンの対比が印象的だった。ハサンの、「テヘランの大学に行きたい」という未来への憧れが伝わる。「サラム」では、理不尽さを感じた。最後、田中先生が「冷たい」と言った政府のあり方は今も変わっていない。中高生に読んでもらって、考えるきっかけにしてもらいたい。

●自分は、読書やスイーツなどの幸せを感じながら日々を過ごしていると思っているが、それは、安全な環境で楽しめる土台があるから。美味しいものを食べたとしても、明日ごはんが食べられるか分からない状況であれば、それは幸せといえるのだろうか。想像力や、ものごとを楽しむ気持ちは、余裕がないと育たない。そして、誰もが将来何かになれる道を与えられるべき。ハサンは頭がいいのに、思い描いた道を進むことができないのは、悲しい。

●正直、この本を読むのは気が重かった。テレビでアフガニスタンの現状を聞くと、ますます読む気にならなかった。でも、誰かに読んでもらいたい本。まずはイスラム世界を知ることが大事だと思う。「白い紙」では、イスラム世界の生活や街の様子が興味深かった。「サラム」で書かれているように、アフガニスタンが多民族国家だとは知らなかった。世界の難民問題も、どこか遠くで起こっているように思えたが、この本を読んでレイラを知ることで思い知らされた。

次回 1月13日(木) 10:00～11:30 オーテピア4階集会室

□『せいめいのれきし 改訂版』バージニア・リー・バートン/文・絵、
いしいももこ/訳、まなべまこと/監修 岩波書店 申込み・参加費不要